豊かの世界
奥多摩
《第20号記念号》
平成23年1月15日
奥多摩観光協会

版画：安藤 修二

～季節だより～

奥多摩　山里歩き絵図
～21世紀宝さがしシリーズ～

平成の時代に入り、これまで観光地と言われていた多くの地域がかつての勢いを失っています。団体旅行から家族での少人数になってきました。

奥多摩町では、これからの観光についてコンサルタントを入れない検討委員会を立ち上げました。町広報紙・防災無線で委員を公募しました。８名の参加があり、町事務局２名・計１０名で「観光ビジョン策定委員会」が誕生しました。

奥多摩の観光は、奥多摩湖、日原鍾乳洞、山々で、他に何もない町だと思いました。しかし、改めて足元を見つめ直した時、奥多摩町には何もないどころか、四季折々に色を変える森林があり、絶えることがない清流が流れ、空気が澄み、水が美味しい町であることに気付きました。

そして何より貴重なものが、昔からずっと変わらない山あいの21の集落です。町内に点在する21の集落は、東西19.5㎞、南北17.5㎞と広大な奥多摩町の中で、山や川を境界線にして集落を形成しており、それぞれが独自の歴史と文化を受け継いでいます。これこそが、奥多摩町のスピリット（精神・志）であり、何物にも変えがたい「宝物」です。

近年、遊歩道などを歩き自然探索する人達が徐々に増加しており、環境に対する意識が高まっています。自動車を捨て、21の集落の宝物を訪ね歩く「山里歩き絵図」を自治会の協力をいただき作成しました。

この絵図は、21の集落ごとに、集落全図、歴史・文化・伝統・史跡・郷土芸能・各種行催事・観光施設・飲食店・宿泊施設等を掲載し、ポケットサイズで作成しました。総集編を含め、全22巻となりました。

各「山里歩き絵図」には、寺院・地蔵などのチェックポイントを一箇所設け、全21のチェックポイントの写真を観光案内所に持参すれば、完歩証と記念品を贈呈します。

（渡辺幸治）

～来　るっせえ～

21世紀の宝さがしシリーズ

この「奥多摩・山里歩き絵図」を最初に眼にした時、まず頭に浮かんだことは、奥多摩を愛する方々が、故郷を大事に思う気持ちから作り上げたものだ、との思いでした。

そのため、土地の方々との触れ合いを通じて活動している我々奥多摩観光ガイドが、真っ先に全コースを歩こうと話し合い、実行しました。

ガイド仲間には、山・植物・野鳥等々の得意分野がありますが、「21世紀の宝さがし」と銘打ってあるように、それぞれのコースで、各自の好みを満足させる新しい発見がありました。

私も、10年余りガイドをしていますが、初めての場所も多く、楽しく歩くことができました。

21のコースには、それぞれ素晴らしいポイントがあります。ここに、少し列挙してみます。

①大丹波：輪光院の牢死者供養碑。⑤小丹波：愛宕山の火防地蔵。⑥棚沢：将門神社。⑦白丸：数馬の切り通し。⑨大氷川：もえぎの湯。⑫南氷川：奥多摩むかし道。⑬常盤：愛宕神社。⑮大沢：倉沢の大ヒノキ。⑯日原：日原の巨樹・巨岩。⑱原：奥多摩湖・みはらしの丘。⑳留浦：姫の石観音。等々。

私は現在、昔の山仲間10数人と、「奥多摩山里シリーズ」として、このコースを辿っています。山歩きの好きな連中だけに、“山里歩き”には当初、ためらいがありましたが、いざ実行すると、土地の方々が丹精込めて守っている神社のたたずまいや、路傍の石仏に感銘を持ち、いまでは積極的に参加するようになっています。

皆様方も、奥多摩の自然に溶け込んだ山里を歩き、21世紀の宝さがしを楽しんでください。

（高野義男）

～行　って来　たぁよ～

奥多摩三山を歩く・三頭山

11月下旬、快晴の中、奥多摩三山の最高峰・三頭山に行ってきました。

都民の森の駐車場に車をとめ、予定より1時間遅れて晩秋の道を歩き始めました。

森林館を横目で見ながら、三頭大滝まで続く広い道に入ります。この道は、チップが敷き詰められていて、足の裏に心地良く、野鳥のウソでも出てきたら最高なのになぁ、などと思いながら、アッと言う間に三頭大滝に。

天気もよく、この時期の落葉樹は、すっかり葉を落としており、木々の間からはっきりと大滝の全体を見ることが出来ます。落下する水量も多く見ごたえ十分。

ここからしばらくは三頭沢沿いの道で、右岸から左岸へ、また左岸から右岸へと、何回か沢を渡った後、右岸の斜面をトラバースしてムシカリ峠に着きます。ムシカリ峠を過ぎ、最後の急坂を登って三頭山山頂（西峰）。富士山が逆光ながら全容を現しています。富士山山頂は風が強いのか、雲が煙のようにちょっと出ています。

谷側から吹き上げてくる風はさすがに冷たく手袋が役立ちます。ただ、日が差しているので暖かく感じます。

小休止の後、下山開始。多摩川と秋川を分ける尾根を東に向かい、中央峰を経て東峰へ。東峰の展望台は、西峰よりテーブルや腰掛けも多く、しかもきれいに整備されているので、是非、利用したい施設。ここからは、御前山と大岳山が目の前に見えます。

さらに尾根道をしばらく下ると広い鞍部に出ます。ここが鞘口峠。右に下れば都民の森の中心部。左に道をとれば、奥多摩周遊道路を横切り、山のふるさと村に至ります。峠からは、このまま尾根を東に向かい、ちょっとしたピークを過ぎてから風張峠に着きます。右下に風張峠駐車場が見えています。

この2つの峠は、まだ、甲州街道が開かれる遥か昔、大菩薩峠を通り甲府盆地へと通ずる「古・甲州街道」が通っていたといわれています。

風張峠からは、落ち葉で埋まった道を、ガサガサと音を立てながらひたすら下ります。そして、ふるさと村に到着です。

山頂付近でウソが出ました。これ、ホント！

（西原潤治）

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その18 ～

「事故多発箇所、危険！」

奥多摩の山にも、遭難事故が起きやすい時間帯と場所がある。時間帯は1日を4等分すると、4分の2から4分の3までの間。つまり日帰り登山なら、お昼を山頂で食べて下山にかかったあたりから、午後3時ころまでの間に多くの事故が起きている。

登りは心肺機能に負荷がかかり、下山は筋力に切り替わるから、膝が笑い出したあたりが一番危ないのだ。昼食が終わり散漫になった精神的緩みもあるのだろう。

事故の多い場所は各山によっても違うが、岩場だったり、ガレ場だったり、急な登山道や、雨の日などは滑りやすい木橋や木の根の多い登山道などが多いようだ。だから、山に登る前、その山では過去、どのあたりでどのような事故が起きているのかを統計で調べてから登ることも必要な事だ。

奥多摩の山の事故で特に多いのは道迷いに起因する転落、滑落事故だ。尾根を下ってきて、その尾根は先端が急に落ち込んでいるので、途中から登山道は急に山腹に方向転換をする。奥多摩でいえば、たとえば天祖山のハタゴヤ尾根を下ってきて、八丁橋方向に向きを変える所だとか、本仁田山から大休場尾根を下ってきて、安寺沢方向に急に向きを変える所などである。

つまり登山道が、主尾根から急に枝尾根や山腹などに方向変換する所を、そのまま主尾根を下って転落するなどの事故が多いのだ。こういう事故は大きな事故につながるのも特徴だ。

だから登山者は、事故の多いとされる時間帯と、登ろうとする山の過去に事故が起きている場所付近を、特に意識をして注意を払い登山するだけで、遭難事故は半減すると思うのだが。

雲取山の登山道で、日原林道終点手前から、長沢谷を渡り大ダワに登り上げる、大ダワ林道と呼ばれている登山道にも、よく事故の起きる場所がある。私が来てからでも、数回は事故が起きているし、死亡事故も発生している。

そこは日原林道から登山道に入り 30 分程登った場所で、小雲取谷出合の 10 分程手前である。大ダワ林道は一旦長沢谷に下りて橋を渡ったら、二軒小屋尾根を登り上げ、大雲取谷沿いに大ダワまで続いているのだが、その場所は二軒小屋尾根側の地盤が弱いのか、よく上から崩れて、急斜面に石積みをして付けてある登山道が崩壊し通行不能となってしまうのである。

平成 17 年6月 11 日午後0時過ぎ、梅雨の時期に、その大ダワ林道で事故が起きた。

山岳ガイドに連れられた登山教室のメンバー7人が、まさにその場所を通過しようとしたとき、崩れて狭くなっていた登山道から生徒のSさんという女性（62 歳）が下の大雲取谷まで転落したのだ。

登山道から、約 50m下の大雲取谷に倒れているSさんが見える。ガイドはすぐ谷まで下りて行き、メンバーの2人は救助要請に雲取山荘まで登った。そして雲取山荘の新井信太郎さんから奥多摩交番に在所していた私のところに、電話で救助要請がきたのである。

山岳救助隊を招集し午後2時 10 分、消防の救助隊とともに出動した。途中、日原に救助要請に下りてきたメンバーの2人とも合流し、現場に向かった。私は上流の緩傾斜帯から回り込んで下の大雲取谷に下りた。現場ではガイドのYさんが心肺蘇生を施していたが、遭難者のSさんには血の気がなかった。午後3時頃までは自力で呼吸をしていたという。

とりあえず消防庁のヘリを要請しているので、病院に運ぶまでは全力を尽くそうと、私とYさんは心肺蘇生を続けた。

しばらくして消防庁の大型ヘリが、大雲取谷沿いに進入して来た。航空隊員も降下して来て、午後4時 20 分、遭難者をヘリにピックアップし、病院に搬送したのだが、残念ながら病院の医師によりSさんの死亡確認がなされた。

数日後、私と日原駐在所の前田小隊長が現場に赴き、事故の検証をするとともに、とりあえず応急措置として岩に植え込みボルトを打ち付け、ザイルをセットし、登山者の安全を確保した。

その後、東京都の水源管理事務所で、現場の石積みをし直して整備したのだが、何せ地盤が弱いため、度々上から崩れる土砂が登山道を埋め、その度に整備を繰り返してきた。

今年の雪解け時期に、また上部の土砂が崩れて登山道が埋まり、水源管理事務所で通行禁止の措置をとった。今回の通行禁止期間は長く、ゴールデンウィークに間に合わないのではないかと心配したが、ようやく整備が終わり4月 28 日に通行止めが解除され、ゴールデンウィーク初日の4月 29 日に、青梅警察署山岳救助隊がビジターセ

ンターなどと共催で行っている「山岳遭難防止キャンペーン」に間に合ったのである。

キャンペーンは早朝から奥多摩駅前で、登山者の登山計画書を受け付けたり、登山相談にも応じ、安全登山を呼び掛ける。さっそく雲取山荘のスタッフの川端さんたちが、解除されたばかりの大ダワ林道を登って行った。

しかし、その日の夕方、雲取山荘の新井晃一君から私の所に電話があり、今日登ってきたスタッフが昨日解禁になったばかりの大ダワ林道の件（くだん）の場所にさしかかったところ、直したばかりの同じ場所で、また上から大規模な崩壊があり、通行できなくなっていたという。スタッフは大きく二軒小屋尾根を高巻いて、ヘトヘトになり、いま山荘に着いたのだという。「事故防止のため上の方は大ダワで通行止めの看板を出すので、下は登山口に通行止めの標示をしてほしい」というものであった。

私はすぐ水源管理事務所に連絡を入れた。そして翌日、日原駐在所の前田小隊長に確認のため現場に登ってもらった。その結果、崩壊は今までにないほど大規模なもので、登山道の通行は不可能であることが判明した。かくしてまた長期の通行禁止措置がとられることになったのである。

Ｓさんが遭難死してから丸５年、今年の６月13日午前11時15分ころ、雲取山荘のスタッフ皆川さんと岩井さんの２人が、通行止めの大ダワ林道を通り下山するため、崩壊箇所手前から大雲取谷に下り、崩壊箇所を巻いて通過しようとしたところ、大雲取谷左岸の岩場の上に、男性が俯せに倒れているのを発見した。２人は右岸から声をかけたがピクリとも動かないので、急いで日原林道の車まで下り、日原駐在所の前田小隊長に届け出たものであった。

前田小隊長からの連絡で、高田副隊長は山岳救助隊を招集した。午後２時 10 分、山岳救助隊員８名は大ダワ登山道に入山した。崩壊箇所手前の落ち葉の詰まった涸沢を約 50ｍ下の大雲取谷に下りた。膝までの沢を漕いで上流に進むと、崩壊箇所先の小尾根の下の岩場に倒れている男性登山者を発見した。すでに死後硬直等がみられ、死亡状態であった。

到着した消防の山岳救助隊と協力し、男性登山者の遺体をバスケット担架に収容し、小滝を越え上流に約 50ｍ搬送、５年前と同様、午後３時 15 分、消防庁の大型ヘリにピックアップし立川の国立災害医療センターに搬送した。その後医師から死亡確認がなされた。

遭難者はザックの中の所持品などから都内在住Ｏさん（71歳）と思われた。青梅署の方からＯさんの奥さんに連絡がとれ、昨日の 12 日の朝から雲取山に登ったことが確認された。Ｏさんの車は唐松谷出合の日原林道で見つかった。また遭難者の所持するデジカメの写真履歴から推測すると、Ｏさんは昨日、日原林道の唐松谷出合に車を停めて入山。野陣尾根の富田新道を通り雲取山に登りその後、雲取山荘前を通過、大ダワ林道を下山。16 時 32 分、大雲取谷の映像が最後になっていた。その後、崩壊箇所を迂回するため、手前の小尾根を大雲取谷に下ろうとした際、誤って谷に転落したものと思われる。時間は 12 日午後５時ころのことではないだろうか。

Ｏさんは登山に相当の自信を持っていたものだろうか。大ダワ林道の下は登山口で、上は大ダワでロープをぐるぐる巻いて封鎖し、「登山道崩壊、通行止」の札が水源管理事務所の名前で下げてあるし、崩壊箇所の前後にも同様の措置がしてある。奥多摩交番や日原駐在所、奥多摩ビジターセンターなどでも登山者に対し「登山道崩壊、通行止」の標示はしてある。

もちろん通行止めの登山道に立ち入ったからといって罰則があるわけでもない。ただこのような生命にかかわる事故も起こる可能性が高くなるということである。

数日後、私は日原駐在所の前田小隊長と一緒に、検証のため事故現場に登った。崩壊現場の手前の涸沢を谷に下り、長靴に履き替え沢を漕ぎ、崩壊箇所を下から写真に撮った。上流の小尾根がＯさんの転落した尾根である。下部は相当の急傾斜となり沢から８ｍ程は垂直の岩場である。20ｍ程上にタオルのような物が引っ掛かっているから、あの辺りから転落し、左岸の岩場に落ちたのではないだろうか。

私たちは 150ｍほど上流まで遡行し登山道に登り上げた。今度は登山道から上を高巻き、崩壊箇所を通過することにした。急な小尾根を登る。約40ｍもある崩壊箇所の上部斜面には幅２、30 ㎝の多くのクラックが口を開けている。これはまた近いうちに大崩壊をする可能性がある。崩壊を繰り返し、遭難事故の多いこの古くから登山者に利用されてきた大雲取谷沿いの登山道は、廃止するか二軒小屋尾根を大きく巻いて通過するように作り替えるなど、抜本的な改善策が必要なようだ。これから関係役所などにも呼びかけていきたい。

（青梅警察署嘱託員 山岳指導員　金　邦夫）

～創刊20号記念・特別企画～

《奥多摩に来た有名人》

何をもって有名人と定義するかは別として、大正時代を含め、それ以前に奥多摩に来たことのある人とその文献を調べてみた。奥多摩という名称が使われるようになったのは、大正13年に奥多摩の名を冠した奥多摩川保勝会創立以後のことである。

◇山田早苗(1773～1855 青梅裏宿生まれ)

多摩川を江戸市中から源流まで遡行した紀行文「多摩川泝源日記」(天保13年・1842年刊)の著者。その中で小河内温泉と題して温泉周辺や湯治客の様子、温泉の効能等を詳細に述べている。ほかに、数馬の切通しや日原の一石山などの記事もある。

多くの文献を引用しながら、しかも多摩川流域に限らず幅広く見聞しているので読みにくい文語体ではあるが、復刻版があるので一読されたい。

◇十方庵敬順(1762～1832)

江戸時代、旅好きの坊さんが残した紀行文『遊暦雑記』に「苧河内村の温泉は、青梅の駅より西の山道へ分入る事八里にして、頗る名湯あり・・・・・・相州湯河原の温泉に増る事十倍」とある。これを読んだ江戸の著名人や温泉好きの人たちが青梅街道をひたすら西に向い、小河内温泉を目指した。なお、「苧河内」の苧という文字は、植物のカラムシのことで、この地域が繊維をとるカラムシの産地だったことが古文書に記されていることからも、興味深い文字使いといえる。敗戦色濃い太平洋戦争末期に奥多摩の小中学校では、このカラムシを子供たちが刈り集めて供出したという。それは麻の代用品として南方戦線用の軍服を作るためだったようだ。

◇アーネスト・サトウ(1843～1929)

幕末維新の時代に若干19歳の若さで日本の土を踏んだイギリスの外交官。彼と奥多摩との関わりについては、次ページで詳述したい。

◇柳田國男(1875～1962)

日本を代表する民俗学のパイオニア。彼が学生時代の明治32年(1899)に鳩ノ巣から標高600mの峯の集落を訪ね、峯の大尽・福島文長宅に2泊した。著書・後狩詞記を読むと「東京から16里の山奥でありながら、羽田の沖の帆が見える。朝日は下から差して早朝はまず神棚の天井を照らす家であった。この家の縁に腰を掛けて狩りの話を聞いた」とあり、まさに、文長宅の縁側が柳田民俗学の原点といっても過言ではない。

◇田山花袋(1872～1930)

明治27年(1894)4月上旬、友人と二人で小金井を出発して多摩川の上流を目指した。ずぶぬれになり、さらにドロだらけのみすぼらしい姿に青梅では、いくつもの旅館で断られ、行き着いたところは牢獄のような宿。出された酒は、溝(どぶ)の臭気を嗅ぎたるときのごとき悪気あり、まさに悪酒。何も彼も皆不遇なり、皆不平なりと嘆いている。しかし、その翌日は、二俣尾の桃を見て全村皆桃花なり。全村皆紅なりと痛く感激している。明治時代の儒学者・林鶴梁が記した多摩川の風景のいかに勝れ、如何に驚くべきものかを自分の目で確かめ、小丹波、棚澤、白丸を皆美しき山光水色のうちに臨めると評し、数馬の切通しの由来についても記している。氷川、楓渓、小河内などの絶景、奇勝を目の当たりにした紀行文『多摩の上流』は、花袋全集に収められている。

◇大町桂月(1869～1925)

終生、酒と旅を愛した男・大町桂月。彼は、大正10年6月に雲取、七つ石を経て鴨沢へ下り、夜9時に小河内にたどり着き温泉に一泊した。彼は、この山行で「私は登山の飲料を試験して見た。『カルピスを友は作りぬ蘆莱の薬といふも之に如かじ』と晶子女史の歌ったカルピスを携へた。」と記し、カルピスを絶賛している。登山に薬用としてのウイスキーを可としているが、「飲用としては不可ぬ。酒も不可ぬ。」と強調している点を我々も心したいもの。晶子女史とは、与謝野晶子のことである。

◇小河内温泉と関わり深い人たち

亀田鵬斎:江戸の儒学者で温泉神社境内にある武州多摩郡小河内温泉之碑の撰者。

酒井抱一:温泉之碑の裏には姫路城主・酒井忠以の実弟で 1000 石取りの御曹司・酒井抱一の「千代にほふ鶴の出温泉や夏知らず」の句がある。

亀田鵬斎、酒井抱一、画家の谷文晁の3人は、「下谷の三幅対」とも呼ばれ、風流三昧の旅好きな生涯の友であったという。旅仲間として3人そろって小河内温泉に来た可能性は捨てきれない。

松尾芭蕉:神社付近に松尾芭蕉の句碑もあるが、小河内に芭蕉の足跡をたどることは困難。お忍びで来たかどうか真意の程は計り知れない。

十辺舎一九:江戸の戯作者。弥次さん喜多さんが活躍する東海道中膝栗毛の著者。湯院の主、原村の名主を訪ねているし、膝栗毛の文中に青梅特産の青梅縞を着た女性を登場させている。

《アーネスト・サトウが見た奥多摩》

幕末から明治維新を目の当たりにした外国人、アーネスト・サトウ(Ernest Satow)。彼は、知る人ぞ知るれっきとしたイギリス人でありながら、日本のことを日本人以上に知る日本研究者。

NHK大河ドラマ「龍馬伝」では、イギリスの通訳で外交官として登場していたのを覚えているだろうか。初めて聞くアーネスト・サトウという名前にアーネスト佐藤？　もしかしたら、日系人？などと思った方があるかもしれない。

ところで、サトウは、日本に滞在中、全国に足を運び外国人用の日本旅行案内記を残した。その中から多摩地区、特に奥多摩関連の記事を中心に紹介しておこう。

▼ 明治10年4月17日

江戸を発って青梅街道を小川、武蔵村山の残堀、箱根ヶ崎を経て青梅宿で一泊(明治10年でも『江戸』と表記している)。翌日、二俣尾と沢井との境界にある奥沢橋から左へ氷川に向かっているが、途中でカタクリを探しても見つからなかったという。しかし、原村の旅館の1マイルほど手前や、特に氷川のすぐ先にある小留浦には、非常に多く見られたと書いている。カタクリについては、花や葉の形状から生態についてまで詳細に解説している点で彼は、相当なカタクリ好きだったようだ。

ここで、面白い記述を見つけたので紹介しておく。ウショロという名前の植物を地元の老女が「ツマラナイ　ハナデ　ゴザイマス」と教えてくれたので、彼は、ローマ字つづりで記述している。ウショロは、多摩各地に残る江戸時代の村明細帳を読むと飢饉時に食べた食物として「宇志やうろ」「う志やう路」「お志やうろ」などと書かれている。これは、西多摩の方言でユリ科のツルボのことで、日本全土から中国にかけて自生する植物なのでイギリス人のサトウは知らなかったのも当たり前。

もう一つ、彼が日本名を知らなかった植物として「アセモ(アンドロメダ・ジャポニカ)」という記述がある。英名を Japanese Andoromeda といえば、ツツジ科アセビ属のアセビ(馬酔木)のこと。アセモでは湿疹になってしまう。

アセビには、数多くの方言名があり、多摩地区に残るアセボという言い方がある。地元の古老から「コレハ　アセボデ　ゴザイマス」と教わったものを彼は、アセモと聞き違えたのかもしれない。アセボから思い当たるのは、有毒成分のアセボトキシン。漢字で馬酔木と書くように動物が食べると口から泡をふいて苦しむという。ちなみに、奥多摩方言では、ブスゴウ。

▼ 明治14年7月14日

午後1時頃出発して箱根ヶ崎の島屋に泊まる。部屋数は多いが設備が悪い。いちばん良好な部屋は養蚕にあてられていた。青梅から万年橋を渡り御岳山を経由して海沢に下り、夕方、氷川に着き、三河屋に投宿。宿の人々は礼儀正しいが設備が悪く、一部の部屋で養蚕が行われていたと記している。明治時代、八王子から横浜港まで通称「絹の道」があったほど養蚕が盛んだった。

7月16日　小河内の名湯へ

「境の村落を通りながら屋根がユリの花でほぼ完全に覆われている家を二軒ほど目にした。今がちょうど満開の時である。このような家はこの山腹の辺りではよく見られる。氷川から原に至るこの短い道の風景は実に絵のようだ。9時20分に湯場に着き原島幸一郎宅の二階の端の部屋に入る。(中略)
この宿の他に青木屋や鶴屋という旅宿があるが、どちらも利用する気にはなれないところだ。原島の家の欠点は蚤がたくさんいることだが、専用の浴室があるのはまことに便利だ。」とあり、施設の設備や環境については手厳しい。明治時代には、田山花袋も指摘しているように多摩川上流地域の旅宿、温泉施設の環境は、劣悪なものだったようだ。

なお、横浜で発行されていた英字新聞 The Japan Weekly Mail (1873.5.3) に Notes of Travell [The Tamagawa Valley] と題して明治6年4月11日から5日間、奥多摩方面への旅の案内が無署名ながら掲載されているが、この記事の筆者はサトウ自身であることは明らかで横浜開港資料館に当時の新聞が保管されているのでいつでも閲覧できる。

最後に、この人を紹介しておきたい。

武田久吉(たけだひさよし)

実は、アーネスト・サトウの実子で母親は、日本人妻の武田兼。イギリスに留学したこともあり、「原色日本高山植物図鑑」の著者。尾瀬沼のダム化を平野長蔵とともに阻止した人で尾瀬を守った恩人として桧枝村の燧ケ岳を望むミニ尾瀬公園管理棟2階に「武田久吉メモリアルホール」がある。

著書の『民俗と植物』(昭和23年発行)に「地名と植物」と題して「多摩川の支流日原川から、秩父郡の浦山に通じる浅間峠の続きに有る蕎麦粒山は、ここに蕎麦が生ずるなどといふ意からでは断然なくて、山の概形が蕎麦の粒に似ているからである。ソバという名はソバムギの略で、稜角(そば)のある麦の意である。」と説明している。

(岡崎 学)

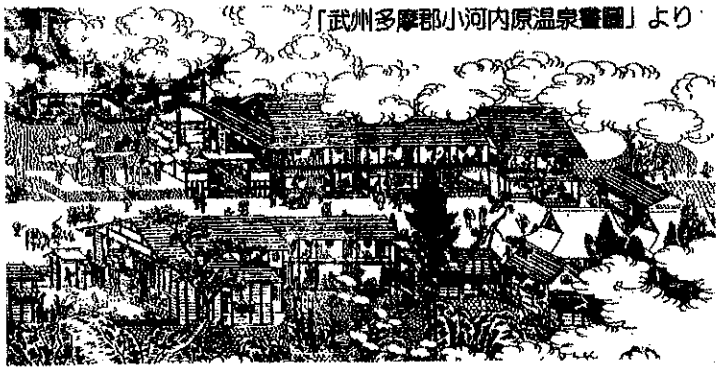
奥多摩昔語り

奥多摩の地名(20)

小河内のうち「原」は、原っぱの原を意味する言葉で、原とか野の地名は、平地が広がっている場所に付けられています。集落は、熱海、原、出野、湯場に集中していて、熱海とは、日向きのよい、地熱の高い所に付けられる地名で、住居は、日当りのよい多摩川の左岸に沿って建てられていました。

熱海向のなだらかな平地は、殆どが畑地で、後に、製材所や小河内ダム工事の飯場が建てられました。原には、原村名主の屋敷跡や曹洞宗の門覚寺跡がありました。湯場は、江戸時代、小河内温泉鶴の湯として喧伝され、湯治場として大いに賑わいました。湯場は、地域の総称で公図にはなく湯沢、湯の内がありました。

鶴の湯の温泉は、熊野三社権現（明治初年から温泉神社）の「御手洗（みたらし）」で、境内の路傍にある湯壷から湧き出していました。「むかし、箭（や）に傷ついた鶴が地に墮ちて、懸崖から湧き出す温泉に身を浸すこと数日、やがてその傷が癒えて飛び去ったのを見て、初めてその効験を知り、村人が浴するようになってから、鶴の湯と呼ぶようになった。」といいます。



「武州多摩郡小河内原温泉畫圖」より

原村の名主は、旅籠「湯本」を経営するかたわら、湯場で村役の仕事をするようになりました。江戸時代後期の名主で、号を古逸（こいつ）という人は、河内の普門寺住職の玉隠の漢詩に対して、和歌で唱和した「鶴温泉十勝」を残しています。自ら経営する湯宿「湯本」を訪れる文化人との交流も多く、「武州多摩郡小河内温泉之碑」を撰文した儒学者亀田鵬斎（かめだぼうさい）や画家酒井抱一（さかいほういつ）らとも交流があったようです。

【資料】　奥多摩町誌、広報おくたま、小河内貯水池郷土小誌、（絵図）江戸時代の温泉風景

（岡部義重）

奥多摩歳時記

「湖底の村」

今から 75 年前の昭和 10 年 12 月 13 日の払暁、小河内村の東小学校には、早期解決を求めて帝都へ押し出そうとしている１千名の群集がいました。

この中には、小河内村民だけでなく、丹波山村、小菅村の村民も含まれていました。地下足袋にゲートル掛けの者、あるいは、ゴム長靴の者等、素朴な扮装ながら、薙旗を立てて出発しましたが、村民の誰もが、これから行くことになる東京の空に思いを馳せ、固い表情をしていました。

昭和６年に持ち上がった小河内貯水池工事の話は、堰堤位置の変更や川崎、稲城の二ヶ領用水組合の反対などがあり、小河内村民は永い忍従を強いられることになりました。いったん離村を決意した上は、一刻も早く解決して、この苦しみから抜け出したいという思いが村民の一大決起行動となりました。

江戸時代の百姓一揆にも似た行動でしたが、青梅警察署の総動員による説得により、氷川で阻止された一行は、奥氷川神社境内へ集められたあと小河内へ戻されることになりました。また、他のルートをとった者たちも、ほとんどの者が阻止され、結局、数十名の代表による陳情団と警戒をすり抜けた 50 名程の村民が合流して陳情することになりました。

しかし、代表団の陳情もむなしく、解決のための調印ができたのは、昭和 13 年６月でした。この年 11 月、起工式が行われ、ようやく小河内貯水池工事が開始されました。

村民の願いがかなって始められた工事も、戦争が激しくなり、昭和 18 年 10 月に中断することになりました。戦後、昭和 23 年９月、工事が再開されましたが、この時の小河内村民は、「永住する決意を宣言して」工事の反対を表明していました。

小河内ダムは、村が回答した昭和７年から 25 年の歳月を経て、昭和 32 年 11 月に完成しました。移転家屋は、戦前戦後を通じて 945 世帯が、遠くは満州、八ヶ岳山麓、埼玉県入間、八王子、立川、昭島、羽村、青梅などへ、分散して移転しました。

【資料】　湖底の村の記録、小河内村報告書、広報おくたま

（岡部義重）

ガイドだより　～多摩川によせて～

多摩川は、山梨県甲州市・笠取山の水干から始まり丹波川となり、奥多摩湖に注ぎ、ダムから多摩川となって東京湾まで138㎞流れています。

江戸時代から昭和20年頃までは、山で伐採された木を川に1本ずつ流して運び、古里辺りで筏に組んで六郷まで運ばれていました。往きは川を使って筏師が運び、帰りは、多摩川沿いの筏道を戻ってきたそうです。

上流の奥多摩町付近は、峡谷で切り立った岩と急流はすばらしい景観です。釣やキャンプ、カヌーをしているのが見られます。私が住んでいる青梅の河辺はちょうど上流域と中流域の境目ぐらいかな。緩やかに蛇行して人々が遊べる環境になってきます。まだまだ清流です。むかしはカジカがとれたそうな。

私は、源流域の笠取山登山、丹波山村から奥多摩駅まで歩いたことがあります。

奥多摩町では、いこいの路、むかし道、氷川渓谷、氷川から鳩ノ巣渓谷までガイドしています。また奥多摩駅・河辺間を走ったりと。この区間は、12月に奥多摩渓谷駅伝が開催されます。

河辺から友田経由で川沿いを羽村堰までよくランニングしています。

今夏から秋にかけて、羽村堰から東京湾手前の大師橋まで53㎞を走り大感激しました。クリアして感じたのは、川や周辺の様子の変化です。羽村辺りから中流域となり、ゆったりと流れていて野球場や公園が設けられています。川沿いの土手の道はサイクリングロードとして多くの人が利用しています。散策する人、ランニングの人、サイクリングする人と様々。福生で秋川と合流し、対岸の高月には田園風景が広がっています。府中になると大きな工場が見られました。そうそう狛江辺りで大きな松が植わっていました。川が決壊し、家が流されたのはこの辺りかなぁ。

二子玉川で野川と合流し世田谷に入りました。兵庫島公園に寄ってむかしを偲び、大師橋まで頑張りました。とたんに海の匂いがし羽田空港が見えてきました。「とうとう東京湾まで来たんだ～！」と嬉しくて涙が出ました。馴染みの多摩川を改めて見直しました。

この多摩川に幾つもの橋が架けられていますが、何箇所、橋があるかお分かりになりますか？数えると眠れなくなりそうかなぁ…。

多摩川は、セラピー効果抜群で～す。癒されること間違いなし。

（武田和代）

施　設　案　内

『そば処　おく』

すべての工程を手作りで行っている手打ちそばのお店です。特に、つなぎに少量の卵を使う田舎風そば（950円）は、奥多摩の昔ながらのそばの味が楽しめます。

電話：0428-85-8185
住所：奥多摩町氷川206　（柳小路）
　　奥多摩駅から徒歩1分

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、冬から春に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（2名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。　（抽選の場合あり）

①から⑤までは「21世紀宝さがしシリーズ」

① 2月2日(水)　倉沢地区・日原地区
　応募締切日　1月20日（ハイキング）

② 2月9日(水)　境地区・中山地区・原地区
　応募締切日　1月20日(ハイキング)

③ 2月16日(水)　峰谷・原地区（雲風呂）
　応募締切日　2月1日(ハイキング)

④ 2月23日(水)　留浦地区
　応募締切日　2月10日（ハイキング）

⑤ 3月2日(水)　川野地区
　応募締切日　2月15日（ハイキング）

⑥ 2月28日(月)　雪の黒川・鶏冠山を歩こう
　応募締切日　2月15日（登山）

⑦ 3月25日(金)　海沢カタクリと史跡探訪2
　応募締切日　3月6日（ハイキング）

⑧ 4月1日(金)　海沢カタクリと史跡探訪1
　応募締切日　3月18日（ハイキング）

募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成23年4月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会
住所 〒198-0212　奥多摩町　氷川　210
電話 0428-83-2152　Fax 0428-83-2789
編集：名人・達人観光ガイドの会